

痛い痛いのとんでいけ (その五)

—— お芋の森 ——

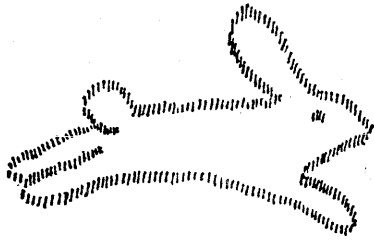
蕪木 寿江

十月二十二日

朝来るとすぐ砂場で遊ぶ。そして事務所へ行って印刷物の残りを持ってくる。しばらくそれを手にしていたが、お弁当を持ってきて誰もいない処で一人で食べようとするので、「お友達と一緒に食べない？」と言うと、「どうして？」と言う。「一緒の方が楽しいわよ。」——「ちょっと待ってね。すぐ机を出すわね、K夫ちゃんもお手伝いしてね。」と話す。——もう大丈夫、待たしても平気、食べたい意欲がでてきたし——、と思いきって言

ってみる。あっちの隅、こっちの隅と歩いてしたが、友達の中に座らせてしまう。フレークを食べた。凄いスピードである。食べたあと包んでいたホイルを放るので注意したが、自分で拾って鞆に入れていたのでほっとした。ともゆきちゃんが早くお弁当が終ったので二人で積木を逆さにして、貼った「お」の字がどこにあるかをあてるクイズをしていた。「10秒、20秒、30秒、60秒、1分……」「ハイ、はずれ」「あたり……」と何回もやっていた。少しあきてきたので「こんどは先生がクイズをだ

すわよ」と言つて、「このお友達の名前は？」と聞くと K 夫はすぐ名札を見て、「よしだともゆき」と言うので、次には名札をかくして、「このお友達の名前は？」と聞くと、「よしだともゆきちゃん」「あたりノ」と皆で拍手をする。友達が次々と名札をかくして名前をあてさせては「あたり」と言つて拍手をした。上靴を見て名前を言うとき、「お顔を見てあてて」と言うとき、顔をじつと見て名前を言つては子どもらしい顔をして笑う。何十回続いたたろう、お母さんが迎えに来たが、「せっかく遊んでいるのだから……」と言つて帰つて貰ひ、あとから送つて行く。



十月二十三日

体力測定の前脚跳びをしていたところへ登園し、すぐに真似をしを跳ぶ。片足はなかなか

かむずかしそう——。砂場に M 先生を見つけ一緒に高速道路をつくる。先生がいなくなるとこんどは滑り台で、滑つてくる友達に、「K 夫、わにだから噛みつくぞ——」と言つて遊んでいた。事務所へ行き紙を取つて遊ぼうとするので連れて外へでる。女の子が鬼ごっこをしていたので交せてもらう。ジャンケンをするとき手は見ないでただ逃げる。長くは続かない。体力測定のかけっこをしていると自分も走る。園長先生と一緒にスタートラインに立ち、「ヨーイ、ドン」と声をだして走つた。そして合図の旗を先生から取つて振つていた。園外保育で誰もいない年少組に行きお弁当を食べようとしていたので、「皆と一緒に食べましょう」と言つてクラスに誘つてきた。かつおぶしのパックと細いポテトチップを全部口いっぱいに入れて食べた。今日は残さなかつた。牛乳あけで友達の蓋を開けて廻つたり、牛乳瓶を洗つたりした。

十月二十四日

鞆はお母さんに渡して部屋の中でどんぐりで遊ぶ。以前はただ沢山持って突っ走るのに落ちついて遊んだ。どんぐりに顔を描いて、「デブドングリ、ヤセドングリ」と言ってみる。「お母さんは？」と聞くと、「ヤセドングリ」と言う。「お父さんは？」と聞くと、「ヤセドングリ」と言う。次から次から顔を描き、「もっとやさしい顔がいい」と言う。そして、「このやさしいのが僕……」と言ってみる。しぼらく遊んでから傍にあった積木で橋を造りどんどん繋げる。「こんどは線路だ」と言ってみる。「汽車をつくらせて」と言う。「汽車をつくらせて」と言う。「僕が乗れません」と言う。ダンボールの中に入れて首から紐をぶらさげて一人で黙々と走る。やがて、「先生も一緒に乗って——」と言う。積木の線路を又延ばして走る。友達のだんボールの汽車に行く先を示す絵本が立ててあったら、「僕にも行き先をつけて」と言ってみる。緑色のマジックでじかに書くとしたので、「行く先が取り換えられるようになってくれないか」と言ってみる。先生のかわりに友

達を乗せてもどんどん走っていった。

十月二十五日

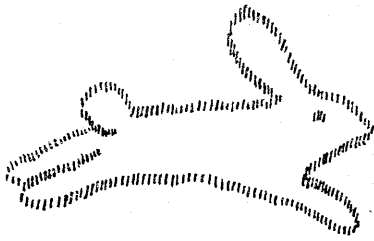
登園すると丁度、体力測定のだんボール投げをしていた。「僕の紙はないの？」と聞く。記録の紙を渡すと一番前に並びたがったが、「順番に並んで待ってね」と言う。後ろについて待った。4m投げた。——今度は友達が何をしようかと関係なく自分のしたいことだけをしたのに……、友達が見えてきたのか——。先生方の眼がまぶしそうにK夫を見ている。

台風の為、お庭の杉の木が倒れたのを植木屋さんが処理しているのを窓越しに見て、「銀杏の木は切らないでね、と可哀想だから」とか「柿の木は切らないでね」と話しかける。のりえちゃんが窓に届かなかったら、K夫が積木を出して乗せてあげる。のりえちゃんが、「K夫ちゃん、やさしい」と嬉しそうに言う。自分以外のものの痛みがわかったような会話に目頭がじんとしてくる。

鶏が卵を産んだので、そおっと頬っぺたにつけてあげると、「あったかいね」と言ってお眼を細めた。

十月二十九日

青組（年長組）でお芋屋さんごっこをしているとK夫も入っていってお芋をつくったり、お芋屋さんになったりして遊んだ。お金もつくった。お芋を一人占めするのではないかと心配したが、たかしちゃんと二人でお芋屋さんになった。お金をためはじめたので、「お芋を売



てきてね」と言うど、

メガホンをつくって売りに行った。K夫のお芋が無くなってしまったらまさしちゃんが、「あっちでお芋を売っているから買いに行ったらいいよ」と言ったが行かなかった。あつ

ちゃんがお芋を持っている友達から集めてきてK夫に渡してあげた。籠と箱の車をつないだ。籠の方にお金がいっぱい入っていた。その上に布団をかけていた。「新聞紙に包んでお芋を売りましょうか」と話すと、「熱い、熱い」と言ってお芋を包んであげていた。もつと遊んでいたそうだったがお屋になったので、「お弁当よ、どこに座わる？」と聞くと、「質問している意味がわかりません」と言った。「誰の隣がいいかしら？」とつけ加えたが無表情であった。ビスケットを二枚食べた。しきりに匂いを嗅いでいた。そしてすぐ又お芋屋さんになった。事務所ではんこうを押していたので「中に入って又やり出すかな」と思ったが、お芋屋さんを続けていた。年少さんで牛乳のふたで工作をしていた。「又、ふたをみんな持っていってしまうのかな」と思ったがそれもなかった。自分がお芋屋さんになって売っているのに、外で御神輿のレコードがなっていたら、怒ったように外に出て水道の傍でおしっこをしてみました。「お手洗いにいくのよね、K夫ちゃんなら我慢でき

るわよね」と言うのと、「もう駄目、我慢できない、疲れちゃう、眠い」と繰り返して言った。何日間だろう、この言葉から遠ざかっていたのに——。友達とお芋屋さんをしたかったのだから。よっぽど楽しかったのだから——。

十月三十日

九時二十分、事務所へ行って切手の貼ってある葉書を一枚持ってきたが、机の上にお芋の籠をのせておくと、「お芋屋さんの続きをしないの?」と言って十一時迄、「ここはお芋の森です」と言って、友達にお芋をあげていた。お金のことは言わなかった。「りすがきました」「兎がきました」等と言ってピョンピョン跳ねながら女の子達がお芋の森に行くと、「はい、どうぞ」と言って新聞紙に包んだお芋を渡す。その表情がとても明るく楽しげで、今迄に見られないいい顔であった。そして、「みんな写真を書いて——」と言った。

今日は柿もぎの予定なので遊びを中絶するようですま

なかったが誘うと、赤白帽子をかぶり、ともゆきちゃん握った手をふり払い、ちづちゃんと手をつないで歩いた。(徒歩三分のところ) 帰ってきてすぐお芋屋さんの続きをして、「いらっしやい、いらっしやい」と声をかけていたが二、三人が買いに行っただけだったので拍手ぬけたようだった。ちづちゃんが柿の絵を描きだすと、「僕も描く」と言って描きだした。「緑の葉っぱもあったでしょ」と友達に教えてあげたりした。「お弁当にしましょう」と言うのと、「食べない」と言っていたが、「お芋屋のおじさん、お弁当にしないんですか?」と言うと席について、あげせんべいだけを少し食べた。そのままいってしまうので、「お芋屋のおじさん、片づけないますか?」と言うと、戻ってきて片づけた。

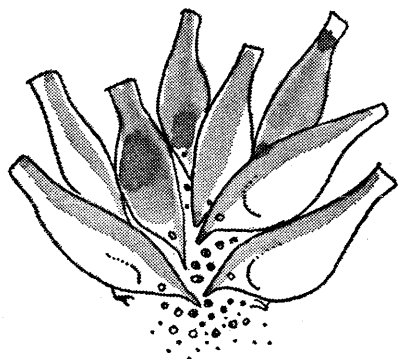
家に帰ってからの様子をお母さんに訪ねると、「今迄は帰るとすぐにパジャマに着替えて寝ていたが、この頃はご飯を食べてからお散歩に行く。サイクリングコースは倦きたので青葉台の方へ行くが、途中の坂はK夫の方が元気に登ってお母さんはついて行くのが大変だ」と話

された。

お母さんも髪にカールをしてきれいになった。「あまりライオンみたいだからね」と言っていて嬉しそうに笑った。

十一月二日

登園すると友達の前で「アーン」と口を開けて挨拶をする。今日は参観日も兼ねてお母さんともえぎ野公園へ行く日である。「遠足、遠足、早く行こう」と言う。



椅子をバラバラにしたので、「きれいにして行きましょう」と言う
とちゃんと直す。滑り台で遊んだちゅちゃん
と先頭になって歩いて行った。公園に着くとお母さんと山に登って遊んだ。お弁当のあ

と、「お母さんはここにいて下さい」と言って先生と又山に登って友達と円くなって座り、「どのお煎餅が焼けたかな」をした。K夫は手を出さなかったがにこにこして見ていた。しばらくして、「かけっこしない？」と言うと、いつもこの公園に来た時に通る道があるらしく、「こっち、こっち」と自分から走って行った。途中でころんだが涙は出さずただ「痛い、痛い」とかん高い声を出したがすぐ立ち上って又走り出した。何度もかけた。靴よりはだしの方がいいよ」と言って腕いで走った。

(神奈川・市ヶ尾幼稚園)